

## 理解しにくい子どもたち

### —— D 夫のこと ——

F · M

最近、理解しにくい子どもたちが、増えてきたように思われる。子どもたちの言動の中に、初めて出会うようなことが多くなり、しばしば驚かされる。

年長組の一学期も半ばを過ぎた頃、朝、登園して遊び始めようとしていたD夫が、唐突に、私に言った。「先生に、ママのこと話したいんだけど。」

「なあに？聞かせて」と関心をむける私に、「でも、ママの悪口になるから言えないんだ」と秘密めかして言う。D夫の心を計りかねて、とまどう私に、D夫は追い討ちをかけるように言った。「先生のことも言いたいんだけど」「なあに？」「でも、先生の悪口になるから」「いいわ。言ってみて」思いがけなく、D夫は今度はあっさりとは承知して、「うん、じゃあ、ママに言っとくから、ママから聞いて」と言った。

翌朝、登園してきたD夫に「昨日のこと、ママにお話ししたの？」と聞くと、「あ、そうだ」とD夫は何か母親に耳打ちする。母親は、よく分からないといった表情で、「先生が、マジックか何かを貸してくれない」というようなことを言っていましたけど」と言う。D夫は、製作材料などを置いてある棚を指し、「こういうの使っちゃいけないんでしょ？」と私に聞く。いつも子どもたちが、自由に使っている棚である。D夫にそう思わせたのは、「片づけ」のときの私の態度だったのだろうか。不思議に思いながら、「お片づけのときは『出さないで』って言うけど、そうでないときは、いつでも使っているよ」と言う私に、D夫は、「うん」とうなずいた。D夫の言いたかったことは、本当に、そのようなことだったのだろうか。私に話したい「ママのこと」とは、どんなことなのだろうか。心に引っ掛かったまま、手がかりもなく日が過ぎた。

D夫の母親が「お話ししたいことがあるのですが……」と面接を申し入れてきたのは、一学期も終わりに近づいてからである。

渦中にあるときは、自分の気持ちの整理がつかないので、話せなかったが、大分、落ちついてきたのでお話ししたいと思った」という母親の話によると、D夫が突然「ぼくには、心が二つある……」と言いだしたというのである。その二、三日前に、母親に叱られて、D夫があやまったときのことを、「あのとき、ぼくは、ごめんなさいと言ったけど、本当は、あやまりたくなかったんだ」「ぼくには、心が二つあるんだ」と言ったという。そして、それから堰を切ったように、朝に、夜に、時をかまわず次々と、以前あったこと

を言い出し、両親は、ひたすら聞き役にまわらされた。両親は疲れ果て、これが何日続くのであろうかと、母親は、ノイローゼになりそうだったと述懐する。このような状態が三日ほど続き、その後、落ちついてきたということであった。

幼稚園でのD夫は、この頃は友だち関係も広がり、自分のしたいことにも、まっすぐに心を向けられるようになってきたと感じられて、ほっとしていたところであった。

D夫は三歳で入園した三年保育児である。入園当初は、不安気に涙ぐんでいたが、十日ほど経つと友だちもできて遊ぶようになり、時々母親を思い出して探す程度になった。私が難しさを感じるようになったのは、妹が生まれる前後だっただろうか。母親への執着が強くなり、おとなへの要求が多くなった。D夫の要求に疲れた母親は、妹の育て易さにかわいさがつり、"D夫さえいなければ……"とまで思ったことがあると自戒している。

当時のD夫の、おびえたような様子の激しさは、私を驚かせた。子ども同士の小さなトラブルにも、"誰もそばにこないで"と激しく泣き叫び、おとなの慰めも拒絶したし、お芋ほりでは、"虫がこわい"と、おびえたように母親の背中にしがみついて、一度も畠におりようとしなかった。

少し落ちついてからのD夫の"トイレ通い"も、記憶に残る出来ごとの一つである。おべんとうの途中で"先生、ウンチいきたい。一緒にきて"というのである。これが何日か続き、その日によって、"ドアの外で待っていてほしい" "廊下で待っていてほしい" "部屋に戻っていて、自分が終わったら来てほしい"など、いろいろな条件をつける。自

分が言った通りにしてくれているかどうかを、途中でドアを開けて確かめる。こんなことを、何日かくり返しているうちに、この“トイレ通い”は、いつの間にか終わった。

登園時に母親から離れられず、あとを追うようになったのも、秋から冬にかけてのことである。三歳児クラスのとときのD夫は、いつも眉をひそめて、気むずかしい表情の子どもだった。

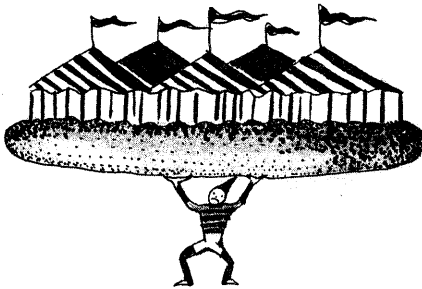
三歳児クラスのとときも、四歳児クラスのとときも、D夫は、特定の子どもと遊びたがった。初めはY夫であり、その次はN夫であった。仲よしができてよかったと思っていたが、時々、相手の子どもが、金切り声をあげて、いらいらと何か言っている場面を見かけることがあった。たいていは、D夫があわてて、相手の子どもをなだめて、おさまることが多く、事情がつかみにくかったが、家での様子を聞くと、二人の関係が、相手の子どもへの負担になることもあるようで、D夫をそっと見守りながら、相手の子どもも支えなければならなかった。

そのような過程を経て、D夫は変わってきたのである。年長組になってからのD夫は、表情が明るくなり、自分のやりたいことに、まっすぐに心を向けられるようになった。以前のように、友だちが作ったものを、もらいたがるのではなく、自分のイメージを、自分で実現しようとする“自分の活動”が、D夫の中に生まれてきた。友だち関係も、閉ざされた二人の関係ではなく、外に向かって開いたグループで、活動によって流動的に、メンバーが出入りしている。D夫の周囲で、いらいらと叫ぶ子どもも、もういない。ちらちら

と、おとなの目を気にするようなこともなくなり、保育者に対しても、まっすぐに心を向けられるようになってきた。

長い時間を要した変化であったし、私にとっても、むずかしい日々の課題であった。D夫は、“自分には心が二つある”と捉えて、それを両親に表現できたときに、自分の中にいろいろな問題を乗り越えたのであろうか。

それにしても、生まれてから六年しか経たない幼い子どもの“心の深さ”、“心の複雑さ”に、改めて、畏怖と畏敬の念を覚えたのである。



(お茶の水女子大学附属幼稚園)